

創刊70号記念エッセイ集

私と人文研CS

—学問の「道場」としての修練の場—

木原 活信

人文研CS研究会は、私にとって研究の基礎を築かせていただいた貴重な場であった。人文研CSにかかわるようになったそもそものきっかけは必ずしも明確な記憶がないが、はじめて研究会に参加したのは1989年頃であろう。当時私は文学研究科社会福祉学専攻所属の院生であった。今でこそ、学際的研究が奨励され、他領域との研究交流が推奨されているが、当時は蛸壺型の講座制的研究意識がまだ根強く他の領域に踏み込むのは容易ではなかった。私自身は、人文研CSのほかに、アメリカ研究所、神学研究科と幅を広げて研究会に参画し、同志社のなかで自由に泳がせてもらっていた。このことを当たり前のようには考えていたが、今から考えれば、相当に恵まれた研究環境であったように思う。

一兵卒としての院生

人文研CS研究会では、山室軍平、石井十次などの研究会の末席に加えていただき、特に歴史研究の手法について基礎から実地で学ばせていただいた。当時は、専任研究員としては歴史学者の故杉井六郎先生、故田中真人先生がおられ、それに若手として吉田亮先生（現、社会学部教授）が研究助手としてCS

全般を支えておられた。研究会のメンバーには、故竹中正夫先生、故小倉襄二先生、などの大御所の先生が参加され、そして当時高野山大学におられた室田保夫先生、そして本井康博先生が中堅どころとして実質上、研究会を引っ張っておられた。当然であるが、院生の私は、研究会の一メンバーであるとはいえ、そのような偉い先生方のなかで、あくまで「一兵卒」であった。

たとえば、石井十次の研究は、最初の数年は、膨大な石井の日誌をとにかく読むという作業中心の研究会であった。そのための基礎資料としての石井日誌を、ひたすら一兵卒として読み、他の若手のメンバーと一緒にPCデータを入力し、それを一定のフォーマットにし、データベース化して、大御所の大先生たちの前で発表するという繰り返しであった。一兵卒などにはまだ石井日誌の解釈は期待されておらず、基礎データを提供するというものであったが、「史料そのものに語らせる」という習慣はこの頃に身に着いたものなのかもしれない。人文研の古い部屋に籠って朝から晩まで石井十次の日誌をひたすら読みPCを入力するという日もあった。資料の探索・収集などでは、事務職員の方々の懇切丁寧なサポートが常にあったことは特筆すべきである。人文研CSの「生き字引」的存在として今でも健在の竹内くみ子さんなど事務局の献身的なサポートがあったゆえにスムーズに研究ができているということを忘れてならない。

当時は、データベースには、エクセルではなく、桐という独自のソフトを使っていたが、ある時、人物名を入力変換ミスして発表してしまい、「一兵卒」としてはやってはいけないミスで、故田中先生にその場でこっぴどく怒られたこともあった。その意味では、凄まじい厳しい道場のようなところでもあった。しかし、研究会終了後は、飢えた院生の一兵卒の労を労っていただき、大先生たちとニュー北京で腹いっぱい遠慮なく食べさせてもらっていた。今から思えばこれも懐かしい楽しい思い出である。

このような基礎作業に格闘するという場であって、あまりの膨大な量を若手

だけがこなすことに不満がなかったわけではないが、最終的に研究成果があがっていく作業にもつき合え、また『石井十次の研究』（1999）の研究書の発刊の際では、院生の身分でありながら拙稿が大御所の先生方と肩を並べて掲載させていただいたこと、しかも第一章を書かせて頂いたことは身に余る光栄であり、アカデミック界で生きていく自信にもなった。そう思えば苦労話もすべて懐かしい思い出である。

竹中正夫先生の一言

詳しく覚えていないのだが、いつの研究会だったか、確かアメリカ研究所と人文研の合同研究会のようなものがあって、そこで私が研究発表させていただいた時のことである。そのとき竹中先生がおられて、私の拙い研究に想定外に興味をもっていただき、そして過分にもそれを高く評価いただき、「大変、刺激的な研究だ。もう十分に熟成しているから、すぐにでも博士論文として提出しないさいよ。研究というのはね、うまく発酵するといいのだが、あまり時間かけすぎると腐敗してしまうよ…」と、その会に参加されていた文学研究科の指導教授たちの前で発言されたのである。当時、文学研究科では博士号は出さない、という不文律の悪しき伝統があったが、その一言がその伝統に風穴を開けるきっかけとなり、博論提出に一挙に弾みをつけることになったことは間違いない。当時、同志社はもちろんであるが、日本の学問の世界においてある意味、尊敬を集めておられた著名な竹中先生の「ご発言」ということもあり、文学研究科の指導教授の先生方に影響があったのであろうことは想像できる。結果、当時としては極めて例外的に文学研究科から博士号を取得することができたのである。これも感謝なことである。

研究会の代表として

そんな私であるが、その後、広島（広島女子大学）、東京（東京都立大学）、

カナダ（トロント大学）と転々とし、ご縁があつて2006年に同志社に戻つてきた。ただ寂しいことに、同じ頃に、田中先生、竹中先生、そして小倉先生等を相次いで見送つたのであるが、これもまた偶然ではなかつたのかもしれない。私の所属は社会学部であるが、その着任をことのほか喜んでくださったのは本井先生、吉田先生たちの当時の研究会の先輩方であつた。そして、着任早々にさっそくこのCS研究会を是非、再建、継承してもらいたいと依頼があり、今度は、研究会代表として18期から研究を担うこととなつた。社会学部教授の立場があり、十分に時間も割けないが、大先輩たちから受けた学恩を少しでも返させていざうと思ふ。しかし、「一兵卒」には慣れているが、どうも「隊長」は不慣れで、研究会を未だ十分に機能的に組織化が出来ていないが、これから、なんとかこのCSを同志社の遺産として継承発展していきたいと思つている。

私にとってCS研究会は、学問における基礎を鍛えられた道場であり、またご縁と恩の場であつた。及ばずながら、今度は新しい世代へ「恩送り」としてこの恵と恩を送り返していきたいと思ふ。

（同志社大学社会学部教授）

贅沢な時間

松 倉 真理子

人文科学研究所のキリスト教社会問題研究会とかかわりを持ったのは、博士課程の一年目のことである。他大学の学部時代にゼミの指導教員だった木原活信先生から、大学院に進学したら「人文研」の門を叩きなさいと何度も勧めら

れていたが、修士課程では社会福祉現場でのフィールドワークとそれをもとにした考察で手一杯だったため先延ばししていた。歴史研究について全くの門外漢で少し躊躇いもあったが、思い切って故田中真人先生に直談判した結果、先生が研究代表を務めておられた第1研究A「女性キリスト者」班に参加させていただけることになった。それから、博士課程はまるまる研究参加者（嘱託研究員）兼研究補助者として過ごすことになった。

当時、「女性キリスト者」班では、日本社会の近代化において女性のキリスト者が果たした役割を、膨大な史資料を丹念に紐解きながら明らかにしていくことを共通のテーマとしていた。実際、女性キリスト者は教育者、社会福祉のリーダーを多く輩出し、社会運動にも熱心だった。参加者それぞれの関心に沿って個別の人物に焦点をあて、ライフヒストリーや言動、思想について史料を用いて分析し発表するという形式で研究会は進められていた。私は、近代日本社会がキリスト教に基づく西洋的価値観や人間観の影響を受けることによって、その後、どのようにしてソーシャルワークの導入や社会福祉の成立につながっていったのかということに関心があった。そこで、ある女性キリスト者に着目し、ソーシャルアクションの足跡をたどる現地調査や関係者へのインタビュー、残された執筆物の整理などを行い、何度か発表もさせていただいた。研究会では「レジェンド」ともいうべき名だたる先生方が勢揃いしているにもかかわらず、初学者である私を温かく迎え入れ、有益な助言や情報を惜しみなくくださった。ここで私は研究の基礎というものを一から学ぶことができたと感じている。特に、研究代表の田中先生には、報告、研究出張、論文執筆の後押しだけでなく、何くれとなく様々な相談に乗っていただき、大変お世話になった。世界の見方やかかわり方を、私は田中先生から学んだ。ちょうどその頃『キリスト教社会問題研究』第五〇号記念を刊行するというので、田中先生のご指示のもと著者別総目次の作成や記念エッセイの編集作業をさせていただいたことも懐かしく思い出される。

その後、九州に赴任することになり、しばらく研究会から足が遠のいていたが、2015年ごろ恩師の木原先生から仕事のお声かけをいただいたことがきっかけとなり、先生が研究代表を務めておられる第三研究「同志社社会事業史の基礎的研究－その源流と水脈－」班に途中から参加させていただけることになった。研究会では、日本社会事業の先駆として尽力してきた多くの同志社関係者たちを一度に俯瞰する「同志社社会事業史年表」を共同で作成するとともに、個別の人物史研究を進めていた。私は途中から参加したこともあり、特定の人物に関する事項ではなく、主に国内・国外の社会福祉全般に関する事項、および一般的な日本史・世界史の事項について、できるだけ信頼できる史資料を入手し、時にはローカルの公立図書館のレファレンスサービスを利用しながら年表を作成する作業を担当した。すでに刊行された権威ある年表にも明らかに誤った記載や、資料によって記述内容の相違が散見されたため、几帳面さと正確さが求められたが、作業に打ち込むことで、日々の雑念から解放され、かつての懐かしい感覚が蘇ってきた。研究会の一環としてアメリカ研修に参加する機会をいただき、ワイルドローバー号に密かに乗り込んだ新島襄がボストンに到着してからの足跡をたどる旅を経験したことも、大きな財産となっている。研究代表の木原先生は、私に社会福祉研究の面白さを教えてくださった最初の先生である。先生の敬愛すべきお人柄に触れ熱心なご指導を受けたことが、教育者として研究者として私が歩んでいく上での大きな力となっている。現在は、後継の研究会に参加させていただいているが、この数年、勤務校の組織改革の波に流されるまま次々と降りかかる新しい業務をこなすのに精一杯で、これといった貢献ができていない。

同志社を離れて、ずいぶん時間が経過した。「人文研」という言葉で無条件に思い出されるのはなぜか、啓明館の玄関から館内に入るとやけにひんやりとしていて階段の手すりが黒光りしていたことや、書庫に史料の探索に行ったときの古いインクや紙から漂ういい匂い。そして、二階の西日があたる小さな

控え室を根城としていたあの頃のこと。特に、博士課程の修業年数をすでに超え、履修すべき科目もなくなった、就職先が決まるまでの二年間のことは忘れがたい。ひねもす研究補助者用控え室か書庫で好きなだけ史料とともに過ごした日々。アルバイトはしていても今のままでは社会人とはいえず、じきに学生でもなくなってしまう。先が見通せず、途方に暮れる毎日だったが、思えば、あの二年は二度と来ない、信じられないほど贅沢な時間だったと感じている。(実際にはTAや非常勤講師の掛け持ち、フィールドワーク、就職活動でかなり忙しかったはずだが。)今なお、「人文研」との時間は、純粋な知的好奇心が刺激され、見える世界が広がっていく、他では得がたい貴重な時間になっている。研究補助者時代に身についた蒐集癖が今も離れず、いろいろな記事や資料、書類を集めるだけ集めて溜め込むのが習性となってしまった。自由な雰囲気の中かで多くを学ばせていただいた「人文研」の各先生方、参加メンバーの方々、職員の皆様に深く感謝している。

(福岡教育大学教育学部准教授)

人文科学研究所に導かれて

松 盛 美紀子

この度は『キリスト教社会問題研究』第70号の特集欄への寄稿につきまして、お声がけをいただき大変光栄に存じます。人文科学研究所と私の出会いは今から20年ほど前で、同志社大学大学院アメリカ研究科に在籍している時でした。当時、第二次世界大戦以前の日系アメリカ人について研究し始めていた私は、資料収集のために W. M. ヴォーリズ設計の啓明館3階にある人文科学研

研究所をたびたび訪れていました。研究所では多くの日系アメリカ人関連の貴重な資料が所蔵されており、特に北米で発行された邦字新聞のマイクロフィルムを事務室が閉室になるまで夢中になって閲覧していたことを昨日のことに思い出されます。また大学院在籍中は、社会学部教授の吉田亮先生が主催なさっておられる第2研究会の研究補助者を仰せつかるという貴重な機会にも恵まれました。第2研究会は人文科学研究所の中でも伝統あるキリスト教社会問題研究の1部門でしたので、研究補助者として研究会に携われることは私にとりまして大きな喜びでした。

第2研究会には、学外の先生方も多数参加されておられ、各分野をリードする先生方のご報告や会場での白熱する議論に毎回立ち会うことができました。こうした恵まれた環境の中で、一次史料や二次史料の読み方やまとめ方、さらに研究者としての心構えを学ばせていただきました。第2研究会の研究補助者時代を振り返って最も印象に残っているのは、当時としてはまだ珍しかったインターネット経由でのテレビ電話システムを使用した研究会の開催です。オンライン会議は現在ではかなり普及して日常の風景となっていますが、当時は本当に珍しい形態でした。アメリカ合衆国に在住しておられる先生や関西圏以外に居住しておられる先生と啓明館の会場とをインターネットのテレビ電話システムでつないで研究会を開催しました。パソコンの画面越しであることをしばし忘れて、まるで1つの会場に一同が介しているような感覚の中で研究会が行われたことを今も鮮明に覚えています。「グローバル化」という言葉が国内外で盛んに叫ばれていた頃でしたので、科学技術の進化とともにグローバル化する学術研究の可能性を肌で感じた瞬間でした。このような先駆的な取り組みに対して、人文科学研究所の先生方や職員の皆様は非常に寛容で、しかも手厚い支援の手をさしのべてくださり、研究補助者として大変ありがたかったです。

さて大学院修了後も引き続き吉田亮先生が主宰なさっておられる第2研究会に参加させていただく機会に恵まれ、現在は嘱託研究員として研究発表の場を

頂戴しております。2013年度から2015年度の研究会では、第二次世界大戦以前に日米間の学生が主体となって開催された日米学生会議の活動を調査しながら、日系アメリカ人社会および二世大学生と日本人大学生の人的交流やそれらの教育効果について研究報告させていただきました。2016年度から2018年度は、日本人キリスト者の松本亨と彼がアメリカ留学時代に所属した北米日本人基督教学生同盟の活動に注目しながら、第二次世界大戦中に強制収容された日系アメリカ人の救済事業に関する研究を行いました。いずれの研究も研究成果が書籍として出版され、大変嬉しく大きな励みとなっています。そして2019年度から始まった現在のプロジェクトでは、前回同様に松本亨の活動や言説を通して第二次世界大戦後の日本の教育再建、特にキリスト教系大学の再建について研究を進めています。

人文科学研究所の研究会は共同研究という性格から、1つのテーマの下に様々な研究者が集い、私が所属する第2研究会も、研究会に参加しておられる先生方は、研究分野、研究地域、研究対象が多岐にわたっており、キリスト教だけでなく仏教や神道などがご専門の先生方もメンバーです。そのため、いずれの先生方のご報告も大変唆に富んでおり、毎回の研究会では新たな発見に驚きと喜びを感じながら知的刺激を受けています。そのような中で特に感銘を受けるのは、先生方が国内外で独自に収集なさった貴重な資料を惜しみなく披露してくださるということです。そして参加者全員で様々な視点からその資料にどのような資料的価値があるのか、どのような分析が可能なのかを検討していきます。これぞまさに共同研究の醍醐味であり、私が毎回の研究会を心待ちにする理由かもしれません。

今振り返ると、研究補助者としてお世話になって以来、素晴らしい出会いとチャンスに恵まれてきました。これも一重に人文科学研究所と第2研究会の吉田亮先生はじめ諸先生方のご指導のお陰と感じております。人文科学研究所とご縁をきっかけにこのような豊かな時間を過ごすことができますことに改め

て深く御礼申し上げます。人文科学研究所が掲げる「文化の創造と発展」という目的に微力ながら寄与できますよう、今後益々精進して参りたいと存じます。

(同志社大学グローバル地域文化学部嘱託講師)

CS レジェンドの伝説あれこれ

—住谷悦治ものがたり—

本 井 康 博

『キリスト教社会問題研究』の創刊

キリスト教社会問題研究会（通称 CS）が、同志社学内有志によって密やかに誕生したのは、1956年のことであった。代表者を務めたのが、経済学部教授の住谷悦治（1895年～1987年）である。

それからすでに65年が経過しているので、発足当時のことを知る当事者は、さすがにいない。そろそろ CS 長老組に手が届きそうな私（現79歳）にしても、当時は同志社中学校に入って2年目の子どもであった。

しかし翌年（1957年）、3年生の時に校内（たしか今はなき新彰栄館前の掲示板）に張り出されたポスターだけは、今も記憶している。「徳富蘆花没後30年記念講演会・遺品展」の案内である。「蘆花」なる字を見たのは、これが初めてである。

もちろん内容や主催者情報には何の関心もなく、講演も展示もスルーした。何十年か後に CS に関わるようになって分かったことは、この企画は前年に生れたばかりの CS が、初めて世に打って出た催し物であった。

さらにその翌年（1958年）、その成果を記録するために創刊されたのが、本誌『キリスト教社会問題研究』である。序文と巻頭論文「蘆花瞥見」を住谷が

執筆している。それを見れば、前年の講演や展示の内容がほぼ透けて見える。

こうして創刊されたCS機関誌は、以後63年間、途切れることなく継続され、今年で70号を迎えるに至った。

CS 発足のキーマン

機関誌創刊で弾みのついたCSは、一大飛躍を図るために翌1959年に同志社大学の人文科学研究所（以下、人文研）に編入し、研究会としての体裁を整えるに至った。代表者は引き続き住谷悦治であった。

正規の研究会となるや、イエール神学校帰りの若き神学者（同志社大学神学部助教授）、竹中正夫（1925年～2006年）の尽力でハーバード^{イェンチン}燕京研究所から研究資金の提供を受けることに成功した。こうして1959年～1974年にわたって巨額の資金援助が実現し、CSが^{しかい}斯界の一大拠点となる道が拓かれた。

その基盤を築いたのが住谷と竹中であつた。彼らCSの生みの親の消息は、一昨年に開かれた人文研創立75周年記念シンポジウム（2019年12月21日、良心館）で発表の機会が与えられた。その時の内容は、「CS（キリスト教社会問題研究会）と共に32年—CSよ、『同志社の顔』を目指せ—」と題して人文研ブックレット67『同志社大学人文研の過去・現在・未来』（2020年3月）に記録として収録されたので、参照されたい。

大失態

住谷悦治はCSのみならず、いくつもの領域で幅広い活躍を印したクリスチャン学者である。にもかかわらず、最近出版された浩瀚な『日本キリスト教歴史人名大事典』（教文館、2020年）には立項されていない。同書はかつての『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）の増補補訂版（ただし人名のみ）として出版されたもので、あらたに672名が追加収録された。

私は30余年前の最初の大事典編集のうちに原稿を何編か依頼されて執筆して

いたので、今回の改訂版編集でも協力を要請された。2012年9月に編集部から執筆依頼を受けたのは、主として同志社系の人物、12名であった。その中には、篠田一人、杉井六郎、竹中^{むつろう}正夫、高橋^{まさし}虔、武邦保といったCSの初期フロント・ランナーを始め、^{おおしも}大下尚一、田畑忍といった周知の同志社人が含まれていた。

けれども、住谷の名はなかった。私ひとりが同志社関係者の執筆を独占するわけでもあるまいと思ひ、提示された人物以外の執筆は、おそらく他の適任者に依頼が行っているであろうと、とくに問題視しなかった。しかし、これが大問題であった。

住谷は最初から立項（掲載人物）リストから漏れていたのである。私はそのことを出版されるまでうかつにも知らなかった。「CS チルドレン」としては大失態で、当然、事前に編集部を確認すべき一事であった。漏れていることが分かれば、即刻「私が書きます！」と売り込むはずであった。

今となっては、もう遅い。本稿を綴りながらも、懺悔と後悔がフツフツと蘇ってくる。

幻の指導教授

学生時代の私の専攻は「経済学史」ないしは「社会思想史」で、まさしく住谷の専門分野であった。それで、同志社大学経済学研究科に入学した私としては、指導教授の第一希望はもちろん住谷悦治教授であった。が、折悪く定年の時期と総長就任が重なったため叶わなかった。

もしそれが実現していたら、その後の私のライフワークとなったテーマ、すなわち新島襄研究やら初期同志社史研究の指導も同時に受けられたであろう。それが叶わぬ以上、もうひとりの「西洋経済学史」担当の相見志郎教授に拾ってもらふ以外になかった。

修士論文のテーマは、ドイツ語もできないくせに「M・ウェーバーの資本主

義の精神」を選んだ。相見教授はアダム・スミスや重商主義の研究者であったが、私は門外漢であったので不肖の門弟であった。ウェーバーに関する指導は一回も、いや一言も受けず、ひたすら外部の研究者の著作を頼りに「自習」するほかなかった。

私にとっては、ふたりのスミヤ教授、すなわち東大の隅谷三喜男と立教の住谷一彦（住谷悦治の長男！）を始め、大塚久雄（東大）、松田智雄（東大）といったいわゆる「大塚史学」の碩学が、いわば（紙上の^{バーチャル}）指導教授であった。ちなみに修論作成で一番影響を受けた大塚が、D・W・ラーネッド邸で開園した同志社幼稚園で園児の頃、ラーネッド夫妻の指導を受けたことを後年知って、ただならぬ因縁を感じた。

私の場合、学部生の時に同志社教会（初代牧師は新島襄）で受洗したこともあって、指導教授はクリスチャン社会学者が好ましかった。住谷悦治も信徒ではあったが、教会生活を金科玉条とするコチコチの信徒ではなかった。会社勤めのために平日のゼミに出席できない社会人院生は、修論作成のため「日曜日に対一というご指導」を毎週受けたことを告白している（住谷一彦・馨編著『回想の住谷悦治』246頁、私家版、1993年。以下、『回想』）。

住谷にとっては、学生指導は礼拝よりも大切だったようである。

「社会科学概論」

住谷悦治が定年まで担当した科目のひとつは、一般教養の「社会科学概論」であった。これは「社会思想史」と共に住谷のために新設された科目で、同志社の許容量の大きさに対して住谷は、「私にとって快心〔会心〕の科目担当」と感謝していた（『回想』269頁）。

学生の人気も高く、立ち見が出る時もあった。ある時の学生授業アンケートでは抜群の一位であった（田中秀臣『沈黙と抵抗—ある知識人の生涯、評伝・住谷悦治—』212頁、藤原書店、2001年。以下『沈黙』）。

ある年の学期末などには、「社会思想史」の最終講義が終わると、期せずして教室が割れるような拍手が起きたことがあったという。ある女子学生は感激のあまり、目を潤ませながら拍手したと回顧する（『回想』269頁）。

こんなことは、私など半世紀を越える学生・教員生活を通じて、一度も経験したことがない。住谷の教育者としての魅力は、学究者のそれに決して引けを取らない。いや、上回るのではとさえ思えるほど、絶大であった。

「社会科学概論」も人気科目で、受講生は千名を越えていた。けれども、住谷は「千枚以上の答案をむしろ喜んで採点していた」と子息は伝える（『回想』403頁）。「社会思想史」と合わせると、3016人になった年もあった（住谷悦治『同志社の一隅から』72頁、法律文化社、1967年）。

1960年代、私も学部生に混じって「社会科学概論」をまじめに「盗聴」した。岡本清一の「政治学」と並んで、学部・院生時代を通じてもっとも感銘をうけた名講義であった。先走って言えば、岡本も住谷も後に私が受洗した同志社教会に転入会した。岡本などは教会墓地の共葬墓に分骨までされた。

住谷の授業で聞いたさまざまなエピソードや雑談は、その後の私の研究と授業にとって貴重な遺産となり、大きな示唆を与えてくれた。たとえば、足利武千代翁からじかに聞いたという秘話（小学校への登校途次、御苑ですれ違う新島先生にお辞儀をしたら、先生も脱帽し挨拶をされた）や、私淑した叔父で牧師の住谷天来との約束を果たすために彼の骨を橋の上から利根川に投げ入れたという武勇伝など、臨場感溢れる話しは、60年近くたった今もなお新鮮である。

住谷は当時、CS研究会を立ち上げて自ら代表者となり、蘆花研究やら「熊本バンド」研究をリードしていた時期だけに、今思うとその分野の話題がよく出た。今で言う「自校史」の魁^{さきがけ}である。

自校史の魁

1970年代になって同志社は「日本の近代化と同志社」と称する科目を立ち上

げ、他大学に先駆けて自校史の先進校となった。私は1987年3月に地方勤務を終え、研究職を目指して京都に帰省してからは、CSを主体に念願の新島・同志社史研究に専念し始めた。が、折しも住谷は入院中であつたので、指導を仰ぐ道は完全に塞がれていた。半年後、バプテスト病院で召天されたとの訃報を耳にした。聞けば、アルツハイマーでの入院生活は4年に及んだという。

一方、私は1990年代にはCS担当の田中真人人文研教授の推薦で「日本の近代化と同志社」科目の担当スタッフ（文学部非常勤講師）として、リレー講義チームの一員に組み込まれた。その後2000年代に入ると、神学部の教授として「同志社科目」立ち上げの軸に抜擢され、教科書『新島襄と建学精神—「同志社科目」テキスト—』（同志社大学出版部、2005年）の執筆を任された。

同書に基づく私の「同志社科目」講義は、ひとつは自分が学ぶ学校が身近な教材である点で、ひとつは「楽勝」科目という理由で、学生からは歓迎され、登録者はまもなく千名を越えた。その結果、（他の教科の受講生を合わせると最高で）1,800通を越えるレポートの採点をする年もあつた。そんな時には、「千枚以上の答案をむしろ喜んで採点していた」住谷の情熱を思い起こしながら、私の知らない輝く原石を掘り出すのを楽しみに読み進めたものである。

同志社総長12年

住谷は第14代総長として12年間（1963年～1975年）務めあげた。3期連続という期間の長さだけでなく、かなり異色の総長であつた。

- ・帝大卒としては大工原銀太郎に続く2人目である。
- ・新島襄（初代）、湯浅八郎（10代、12代）と並ぶ3人目の群馬県人。
- ・非同志社卒業生としては、第四代西原清東^{さいばらきよき}、第五代片岡健吉、第九代大工原銀太郎に続く4人目となる。

住谷総長と私は、教室や研究会、研究室はもちろん、個人的な「師弟関係」はまったくなかったが、大学院修了後に唯一度、接点があつた。同志社が1975

年に創立100周年を記念して懸賞作品を広く学内外から募集した時である。私は恩師の強い勧めで応募してみたところ、思いがけなくも「論文第2席」（第1席は該当作なし）に入賞した。表彰式は同年3月24日に相国寺前のアーモスト館ホールで行なわれた。

私はその席で、同志社創立百周年記念事業委員会の住谷委員長から賞状と賞金を受け取った。住谷総長本人と一対一で相對峙したのは、後にも先にもこれ一回切りであった。

次男の住谷馨によると、住谷はこの委員長のポストを「大変名誉と想い、うれしかったようである」（『回想』406頁）。それより8か月後の11月、住谷は創立100周年記念式典（宝ヶ池・国際会議場で大々的に挙行）で総長職を上野直蔵に引き継いで、長きにわたった総長職を降りた。

ちなみに私の受賞作は「喪家の狗・新島襄^{いぬ}」といい、後に全文が『新島研究』64（新島研究会、1983年5月）に収録された。ただし、論文題が「新島先生らしからぬ」と思われたからであろう、編集委員会からの要望で改題を余儀なくされた。

しかし、その後、自著に再録する場合は、原題に戻した。これは私の書いた最初の新島論と言ってもよい作品で、新島研究家としての出発点となったばかりか、今でも「喪家の狗」には愛着がある。「作家は第一作に向かって完成する」と言われるように、新島を見る私の視線はその後も「喪家の狗」路線を逸れることはない。

住谷自身も新島を誰よりも敬愛しながら、新島をけっして偶像視はしないと宣言し、「校祖」といった「新興宗教めいたお筆先のようないい方」を避けている（住谷悦治『同志社の一隅から』77頁、法律文化社、1967年）。

住谷の人物研究にも私は同様の視座で取り組みたい。

（元同志社大学神学部教授）

キリスト教社会問題研究会（CS）と私

室 田 保 夫

私がキリスト教社会問題研究会（CS）に関わりを持ったのは、大学院の修士課程の頃からで、かれこれ半世紀近く前になります。いつの間にか古参の域に達しました。その経緯は単純で、ある用事で杉井六郎先生の研究室（当時は学生会館の北側）を尋ねたことがきっかけでした。初対面であったがいろいろとお話した記憶があります。偶然にも留岡幸助の研究会が始まった時で、先生からは是非、研究会に出てみればと言われました。その後、嶋田先生や小倉先生からも勧められ、こわごわ研究会に出席するようになりました。その時のメンバー、龍谷大の守屋茂先生が最年長、確か70過ぎて、ちなみに杉井先生が50歳前半、小倉、住谷先生が40歳後半という若さで、今は自分が守屋先生の歳になっているという現実には愕然としています。

さて私とCSはこのように留岡幸助の研究会が出発でした。研究会での私の仕事は文化史の山本幸規氏と著書や論文の整理でした。文献調査は留岡の対象とされる100以上の雑誌・新聞の調査でした。また研究は丹波第一教会時代の留岡を調べるということでした。同志社卒業後の留岡が就いた初めての職場でした。彼が赴任した丹波第一教会（今は丹波新生教会）は地元でありましたので、地の利を生かして園部の宮内牧師さんの家にある丹波第一教会資料を調査すると、留岡牧師時代の教会資料や留岡の書簡がいくつも見いだせたという幸運に恵まれました。それで丹波教会のことを調査し、初めて『キリスト教社会問題研究』26号（1976年）に「丹波第一教会時代の留岡幸助」として載せていただきました。私にとっては感慨深い論文です。その後、留岡幸助の著作集

編集作業において、多くの雑誌や新聞にある留岡関係の資料を拾っていく作業、これは大変でしたが、地道な研究方法と共に大いに役だっています。まずは資料を可能な限り収集して行くという方法、一見無駄のようでもありますが、これが歴史研究の常套手段です。併行して教会研究や『六合雑誌』、『七一雑報』の研究等にも参加し、学問領域の違う先生がたの研究発表を聞かせていただき、多くのことを学ばせていただいた次第です。とりわけ人文研の研究の特徴とも言える実証主義の方法は、私にとって新鮮なもので研究の基礎となったように思います。当時、歴史学の分野では、色川大吉や安丸良夫、鹿野政直らの民衆（思想）史や柳田国男の民俗学の評価（柳田学）が登場してきた時代状況でした。

さて、留岡幸助研究は主に著作集の刊行に力が注がれ、漸く1981年に5巻本にまとめ完成しました。多くの思い出があります。静岡袋井の報徳社、東京の矯正協会、家庭学校（東京と北海道遠軽）、或いは丹波教会、亀岡、園部、綾部、福知山と車でメンバーともども廻ったこと等、総て資料収集のみならず、現地を体験していくという醍醐味を味わったことが重要です。この著作集は幸い毎日新聞の社会福祉顕彰特別賞をうけました。その受賞を記念して村山幸輝先生と講演をするということもありました。講演会には留岡幸助の8男の大塚八郎氏（留岡幸助と瓜二つ）もお見えになりました。

その後、杉井先生から今度は山室軍平研究の相談があり、『ときのこと』等、救世軍からの寄託本もあり条件が揃っており、是非これは同志社ですべきであると思いました。私の三十代の時です。当初は多くのメンバーでもって山室の研究が立ち上げられました。また田中真人先生はこの頃よりデータベースに関心をもたれ、研究の一助として研究方法がとられたこともあります。この成果は『山室軍平の研究』（同朋舎、1991）として刊行されました。これには詳しい山室の年表が付されています。

さて、留岡、山室が終わり今度は石井十次の研究にとりかかることになりま

す。私の四十代の仕事でした。これにはこれまでの自然の流れ、留岡、山室の次は石井が延長線上に位置づけられました。杉井先生から宮崎出張を命じられ、石井記念友愛社、石井の資料館に行き児島草次郎さんに初めてお会いし、懇談の結果、同志社でやるということになりました。資料館の事情もあり、これは非常にいいタイミングで、同志社大学人文科学研究所でのこれまでの実績が背景にあったことと思います。研究会メンバーで何回か高鍋で調査をし、実篤の「新しき村」の近くまで行った思い出もあります。その成果として『石井十次の研究』（同朋舎、1999）が出版され、その巻末には資料として石井の日録に近い年譜が掲載されています。その出版記念として宮崎県高鍋で高鍋町立美術館のこけら落としを兼ねて開催され、田中真人先生と講演をしましたが、それは人文研ブックレット No. 9 「『石井十次の研究』刊行記念講演会」（1999年12月）に掲載されています。これも良い思い出となっています。ちょうどこの年に関西学院に移りました。暫く研究会とご無沙汰でした。

このように、私とCSとは長い付き合いで、幾つか『キリスト教社会問題研究』に書かせていただきました。しばしば杉井先生はこの研究誌は東京では教文館で販売され、その重要性を語られたことを記憶しております。当時の人文研CSはいわゆる外人部隊が多く、いつも活発な議論が展開されました。研究会終了後は杉井先生の部屋で、あるいは田中先生を囲み、近くの店で食事し余韻に浸った楽しい思い出が今は蘇ってきます。私にとって人文研とこの研究誌『キリスト教社会問題研究』は多くの研究者の方との出会いがあり、刺激と学恩を受け、忘れ難いものとなっています。

（関西学院大学名誉教授）

同志社人とブラジル

根 川 幸 男

はじめて私が人文科学研究所（以下、人文研）を訪れたのは、今から30年以上前、大学院生の頃だったかと思う。何を調べに行ったのか記憶にないが、啓明館の赤レンガの重厚な雰囲気とよく磨かれた階段の手すりの光沢が印象に残っている。その後、私は放浪生活の末、ブラジルに渡り、現地の大学教員となった。2008年の訪日研究の際に吉田亮先生をお訪ねし、北南米の日系移民についてご指導をいただくようになった。それ以来、同先生が代表を務める「1930年代アメリカ日系宗教の二世教育活動」など部門研究会に参加させていただき、ブラジル日系二世の教育史を中心に研究を進めている。

実は、同志社とブラジルは浅からぬ縁で結ばれている。ブラジルは現在、約190万人という世界最大の日系社会が存在する。それは、1924年の米国の新移民法により日本人移民が排除された後、南米、特にブラジルへの移民が集中したからである。1908年から1973年まで、ブラジルには約25万人の日本人が渡った。特に、1920年代半ばから30年代前半、ブラジルは日本人海外発展の最適地として注目された。そんなブラジルに、進取の気性に富んだ同志社人がかかわりを持たないはずがないのである。

ブラジルに渡った同志社人として、まずは西原清東（1861～1939）をあげたい。同志社第4代社長や衆議院議員を務めた後、1903年に渡米。テキサスの米作王として知られるが、彼がその成功後にめざしたのがブラジルであった。次に、星名謙一郎（1866～1926）があげられよう。星名については、飯田耕二郎氏の一連の研究に詳しいが、⁽¹⁾ハワイで伝道と新聞発行に携わり、テキサスに

移って米作を試みた後、1909年にブラジルへ。リオデジャネイロ州の山縣農場に滞在後、サンパウロでブラジル最初の邦字新聞『南米』を発行。内陸で土地開発と植民地経営に転じたが、途半ばにして凶弾に斃れた。後に同志社大学学長となる星名泰は長男で、テキサス時代に生れている。

同志社初期の卒業生古谷重綱（1876～1967）は、ミシガン大学に留学後、国民新聞記者を経て、外務省に入省。駐アルゼンチン特命全権公使（ウルグアイ・パラグアイ公使兼任）を勤めた後、1928年ブラジルに移住した。バナナ生産や養蚕業に従事するかたわら、1936年にサンパウロ法科大学日本文化講座の初代講師となった。戦後も日系社会の重鎮として、特に勝組・負組抗争の収拾に活躍した。⁽²⁾

私は、ブラジル日系二世の教育史の中で、特に、小林美登利（1891～1961）や岸本昂一（1898～1977）などキリスト者によるブラジル日系子女教育の歴史的意义について研究を焦点化させてきた。⁽³⁾小林は同志社大学神学部出身の牧師であり、ハワイ・米本土留学後、宗教的指導者を欠いたブラジル日系社会に福音を伝えるため、1921年12月にブラジル渡航。ただちに西原を訪ね、その教を請うている。以後1925年にかけて、ブラジル最初の日系プロテスタント教会や寄宿舎学校「聖州義塾」を創立した。また、小林は剣道家でもあり、1933年に伯国柔剣道連盟の創立に参画。キリスト教と語学教育、武道を通じて多くの日系子女を教育し、ブラジル社会に送り出した。一方、岸本は、救世軍の熱心な支持者であり、聖州義塾に学んだ後、1933年に「暁星学園」を創立。やはり多くの日系指導者を輩出した。⁽⁴⁾

1920年代の終わり頃、カウボーイに憧れ、ブラジルに渡った同志社のラグビー少年がいた。同志社中学に学んだ清水尚久^{ひまし}（1911～1998）⁽⁵⁾である。愛媛県宇和町の出身。父の伴三郎は同志社英学校出身で、晩年の新島襄の警咳に接した。宇和町長や愛媛県議を勤めた後、移民する次男尚久について自らもブラジルに渡航している。1928年、サンパウロ州バストス移住地に入植した伴三郎・

尚久父子は、一時はやはり同志社出身の母シン、三男峰雄も呼び寄せ農場を経営した。伴三郎とシンが帰国した後も尚久はブラジルに留まり、牧場支配人となってハリウッド映画さながらの活躍をした。1937年には、ソロカバーナ鉄道沿線史上最大と言われた隊商^{トロツバ}を指揮するまでになったが、病に倒れた。上記の古谷が戦後、勝組テロリストに狙われた時、それを阻止するために同居したのが射撃に長じた尚久であった。戦後は音響技師に転向し、ブラジル同志社校友会会長も務めている。1967年に明仁皇太子御夫妻（現上皇・上皇后）がブラジルを訪れた際、最後のお茶会をエミリオ・マタラーゾ邸で楽しまれたが、その邸宅の音響設備一切を取り仕切ったのが尚久であった。

以上は、ブラジルで活躍した同志社人のほんの一部である。現在、『同志社150年史』の編纂が進められていると聞く。『同志社百年史』には、ハワイや米国での多くの同志社人の活躍に頁が割かれおり、人文研もハワイ・北米移民の研究では大きな成果をあげている。一方、戦前から少なからぬ同志社人がブラ



図：小林美登利と創立の頃の聖州義塾（後列中央小林）。マルチエスニックな教育が行われていたことが知られる。

ジルに渡り活躍してきた。例えば、ハワイや米国での経験をブラジルでの排日予防啓蒙などに活用し、一定の成果を上げている。同志社史は、こうしたブラジルでの活動を視野に入れることによって、よりグローバルな歴史としてその裾野を拡げることができるはずである。『150年史』には、ぜひブラジルとのかかわりについて取り上げていただきたいものである。

注

- (1) 飯田耕二郎 (1984)「移民の先駆者・星名謙一郎の生涯」『キリスト教社会問題研究』第32号 pp.146-172、同 (2017)『移民の魁傑・星名謙一郎の生涯—ハワイ・テキサス・ブラジル』不二出版など
- (2) 勝組・負組抗争については、根川幸男 (2013)「第二次世界大戦前後の南米各国日系人の動向—ブラジルの事例を中心に」『立命館言語文化研究』第25巻1号 pp.137-154参照
- (3) 根川幸男 (2016)『ブラジル日系移民の教育史』みすず書房、第4～5章参照
- (4) 根川幸男 (2016)「ブラジルにおける日系二世教育と人材育成—「バガブンド」から「ドットール」へ理想的日系市民モデルの創出」吉田亮編著『同志社大学人文科学研究所研究叢書 LI 越境する「二世」—1930年代アメリカの日系人と教育』現代史料出版 pp.233-257、同 (2013)「ある戦闘的キリスト者の「大陸雄飛」とブラジルでの教育活動—岸本昂一と暁星学園をめぐって」『キリスト教社会問題研究』第62号 pp.199-225など参照
- (5) 根川幸男 (2001)「IJU who's who 地平線の群像 語り継ぐ破天荒人生15清水尚久—カウボーイになった日本人」『海外移住』600号、国際協力事業団 pp. 22-25参照

(国際日本文化研究センター プロジェクト研究員)

CS と私の研究生活

竹 本 英 代

『キリスト教社会問題研究』第70号の記念号、謹んでお祝い申し上げます。ここでは、自分の研究生活を振り返りながら、私にとってのCS（キリスト教社会問題研究会）について書き残しておきたいと思います。

私とCSとのつながりは、2002年に吉田亮先生の第3研究会にオブザーバーとして参加した時に始まります。当時私は、日本学術振興会の特別研究員（PD）として広島大学大学院に在籍していました。肩書きだけみれば悠々自適に研究三昧の日々を送っているように思われますが、大学院は修了したものの就職先がないポストドクターで、人生の先行きが全く見えず精神的に苦しく研究も滞っていた時期でした。当時の指導教官でありキリスト者であった故佐藤尚子先生は、「竹本さんは、四重苦なのよ。」と嘆かれながら、私の就職先を賢明に探してくださっていました。佐藤先生のいう四重苦とは、女性であること、博士号を取得していること、指導教員に力がないこと、専門分野の教育史の就職先がないことを示しており、三重苦以上の言葉を聞いたのは、その時が初めてのことでした。

学振のPDになる前に広島大学教育学部の留学生担当の助手を一年半ほど務めました。日本語教師でもない自分が外国人の留学生、具体的には中国や韓国から来日した大学院生に日本語や日本文化を教え、生活指導も行うのです。日本の大学の留学生教育は国際的に考えてこれでよいのかと自問するようになり、日米関係史の視座から日本の国際理解教育の歴史について問い直したいと思うようになりました。日米関係の知識については研究会で研鑽する必要があ

ると感じ、日本国内で参加できる研究会を探していました。当時私は、同志社大学か東京大学か早稲田大学の研究会で迷っておりましたが、所属していた教育史学会で面識のあった同志社大学の沖田行司先生にCSについて相談したところ、沖田先生から吉田先生の「アメリカン・ボード宣教師と日本社会（1869-1895）」の研究会を紹介いただき、参加できることになりました。以降、CSの社外研究員として現在に至っております。

CSでは多くの研究者と出会い、戦前日本における外国人に対する日本語教育の研究を進めていくことになりました。宣教師の日本語教育についてご意見、ご助言を下さった茂義樹先生、女性研究者を支援するといつて京都日本語学校の調査をご指導いただいた坂本清音先生、CSで出会った先生方は数えきれません。なかでも吉田先生と本井康博先生は、私が研究を持続できる精神を培ってくださいました。吉田先生は、年齢、性別、学閥、国籍、宗教、専門分野等、あらゆるものを包括して真摯な研究が行える研究会、他者と共に真理を探究できる研究会を提供してくださいました。学生宿舎ともいえそうな夏に行われた研究会は、朝から晩まで研究発表と討議が続けられるものでしたが、私にとっては研究のことだけに一日中没頭できる有意義で貴重な時間でした。吉田先生は研究会の成果を共同研究として総括して定期的に刊行するという、研究者としてのあるべき姿を示してくださいました。

本井先生は、同志社内の資料調査はもとより、他大学に所蔵されている資料や地方の教会の資料調査にいたるまで、一緒に足を運んで指導をしてくださいました。本井先生は研究だけでなく時には私的な悩みまで聞いてくださいました。先生のご研究される姿や著作物から私は研究することの楽しさを学びました。自分の大学の指導学生でもない私をお二人の先生は支え続けてくださいました。こうしたなかで、私は『キリスト教社会問題研究』の53（2004年）、56（2008年）、57（2008年）、59（2010年）号に論文を発表しました。その論文が多くの方の目に触れ、次の研究へとつながっていきました。

2019年12月に同志社大学人文科学研究所の75周年の記念シンポジウムが開催されました。CSでお世話になった先生方にお会いしたい一心でシンポジウムに参加したところ、本井先生と吉田先生が登壇され「CS（キリスト教社会問題研究）と共に32年」と題してCSについて語られました。お二方のお話を聞きながら、私はCSが歴史ある研究会であることとCSの意義を改めて知ることになりました。同時に、自分の研究生生活のなかで不遇と思っていた時期が、実はCSが生み出した二人の偉人に出会えた好機であったことを確信しました。

私は2004年によく大学の期限がつかない職を得ました。最初の職場には本井先生が心配して訪ねてきてくださいました。時が経つのは早いものでCSに入会して20年になろうとしています。私は相変わらず吉田先生の研究会に所属し続けておりますが、20年の間に研究会のメンバーは様変わりし、共同研究のテーマも変化しました。しかし、常に新しい知見を探求し、自由で真摯な研究の場であることに変わりはありません。

私はキリスト者ではありませんが、この20年間の研究生生活を振り返りますとキリスト者の先生方との出会いによって研究が継続してきたことがわかります。研究会を探していた頃、佐藤先生が「私の研究は、研究会によって育てられたのよ。」とおっしゃり、私がCSに参加することを喜び、背中を押してくださいました。忘れられない佐藤先生のこの言葉は、私の研究生生活にもあてはまる言葉となりました。私にとってCSは、今にもとまりそうな研究の歩み、精神を常にエンカレッジした場でありました。

（福岡教育大学教授）

啓明館随想

—「CS 確立期における「回顧と展望」補遺—

田 中 智 子

「人文研」と聞いてまず脳裏に浮かぶのは、人ではなく書籍や史料でもなく、建物なのかもしれない。意匠あふれる外観や内装も魅力的だが、書庫——ウンベルト・エーコ原作『薔薇の名前』（映画）をも思わせる奥の院——に足を踏み入れなければ、啓明館を知ったことにはならないだろう。

空間が独特な時間を作り出す。あの匂いと時空に独り包まれていると、どことなく不安を覚え、必要な本を抜き取って、一刻も早く此岸に戻りたくなる。庫内で人と鉢合わせると、なぜかぎくっとする。一方で、しゃがんだまま本をめくり出してしまい（机や椅子がないのである）、長い時間、「現実離れ」してしまうこともあった。

2010年10月から2016年9月までの6年間、専任研究員を務めさせていただいたが、『キリスト教社会問題研究』に毎年成果を発表することを、何となくの目標にするようになっていた。締め切り迫る夏休みは投稿に捧げ、書庫の時空を味わう余裕もなく、現実的にばたばたと利用するばかりだった。

今から7年前の第63号（2014年12月刊）は、70号記念ならぬ、「人文科学研究所創立70周年記念」号であったが、その折には、「CS 確立期における「回顧と展望」—篠田一人氏談話記録（1969年）—」と題する拙文を掲載していただいた。前半では1969年4月に行われた「CS セミナー」の音源を活字化し、後半ではこの記録をもとにCSの史学史的意味づけを図ることで、今後のCSの課題を認識しようとしたものである。「CS セミナー」とは、CS創設の中心メンバーであった文学部教授・篠田一人氏に、「CSの歩み」を振り返ってもらう

という企画を中心にした催しであったが、その詳細は歴史に埋もれていた。

今あらためて拙稿を読み返してみて、マルクス主義と近代化論という枠組みから、CSなるものの成立を捉えてみるという後半での考察は、方向性として間違っていないかと思っている。ただ、篠田氏の口からも、先代（初代）CS代表・住谷悦治氏の主導性がこれだけ説かれているのに、私自身、この点をどうしてもっと掘り下げなかったのか、不思議でならない。「篠田一人」という存在に初めて接し、語り口にあらわれるその識見が印象に残り、周知の「住谷悦治」の方にまで気が回らなかったのかもしれない。CSセミナーの開催時、悦治氏はまだご存命中であったはず。総長としてCSの一線からは退き、学園紛争まっただ中の学内行政に汗をかかっていたのだろうか。

折しも2021年度から、研究所のプロジェクトとして住谷悦治日記の研究が始まったとのこと。CSにまつわる悦治氏個人の具体的な活動について多くの事実が明らかになり、史学史的な立ち位置の考察も進むものと期待がふくらむ。理念や研究内容の面でもファンド面でも、氏はCSのキーパーソン、創設期CSそのものであるはずだから。

「CSセミナー」では、近代日本の社会思想・社会運動史上、プロテスタント・キリスト教徒の果たした役割の重大な意義にかんがみ、関連の「資料収集」を喫緊の課題としてCSが発足したことが、あらためて強調されている。

「歴史」は、最終的には「語り」(Histoire)として叙述されるべきであり、文字おこしやリストアップにとどまる「資料紹介」は、安易な逃げ込み策になりかねない。そのように承知してはいるものの、在任中、CSの活動を通じて知り合った各研究科院生の方々には、発足時の趣旨を体現して収集された雑多な資料群を精査し、『キリスト教社会問題研究』誌上にて、あるいは冊子として、目録を世に送りだしていただいた。半世紀越しの「CSセミナー」に啓発され、いわば「啓明館のお宝」の発掘と開陳をもくろんでみたのである。

京都が生んだ推理小説作家・綾辻行人氏の作品に、『〇〇館の殺人』と題し

た、世に言う「館（やかた）」シリーズがある。わりと本気で綾辻氏に推薦申し上げたいのだが、啓明館は、シリーズ次作の舞台に選ばれて全く遜色ない。ここは、時空をゆがめるからくり屋敷。書庫内で倒れ込んでいるのを発見された何某は、捜査の結果、何やら過去を妄想しながら高い書棚に手を伸ばし、踏み台から足をすべらせ、階下まで墜落しただけと結論づけられた。しかし、すべての登場人物が現場から立ち去った後、やおら何某は立ち上がり、屋根裏の「あの」秘密の扉からタイムスリップしてきた若き日の住谷氏や篠田氏と遭遇する。そこには薔薇ならぬラベンダーの香り？——こうなるともはや「館（やかた）」シリーズではなく、筒井康隆（or 大林宣彦）『時をかける少女』の世界である。

やはり、Histoire の源泉となる啓明館書庫こそが、私にとっての「人文研」であり、数々の思いが募って眼から何かがこぼれそうな、愛しく恋しい（そしてちょっと怖い）空間なのである。

（京都大学大学院教育学研究科准教授）

1980年以降の CS を振り返って

吉 田 亮

1 前史

CS は1956年に発足し、59年に「近代日本の社会思想、社会運動に及ぼしたキリスト教、とりわけプロテスタントの影響を明らかにする。資料の蒐集、整理、研究をする」という研究方針を確定したとされている。拙者は1980年以来、研究補助者、専任研究員、兼担研究員と名称を変えながら CS に現在まで関わ

らせていただいているが、70年代以前のCSについては記録から想像するしかない。80年代以降のCSを理解するためにあえて70年代以前のCSを小括すると、60年代に熊本バンド、賀川豊彦、自由キリスト教、戦時下抵抗、大正期におけるキリスト教とデモクラシー、山本宣治他の研究を中心に研究が進められたと記されており、キリスト教と社会との関係について国内関連学会や海外からも注目される存在であり続けてきたと聞かされている。さらに記録によると、70年代にはキリスト教社会事業家及びキリスト教雑誌の研究によって社会改良・福祉や世論形成に焦点をあててキリスト教の社会への影響を探求するようになり、80年代を迎えたとある。

2 1980年代

CSは全体として、70年代の活動を継承した社会事業家留岡幸助の研究、『七一雑報』や『六合雑誌』などキリスト教雑誌の研究に加えて、排耶論の研究を進めることで、社会事業、言論・思想、在来宗教との関係に焦点をあててキリスト教が近代社会形成に与えた影響を明らかにしようとしていた。当時、CSは人文研の他研究会とは違い、2名の専任研究員、杉井六郎先生（日本思想史）と田中真人先生（日本社会運動史）を配置し、杉井先生はCを田中先生がSを担当するという形で研究を牽引しておられた。拙者は1980年4月に研究補助者としてCSに参加させていただくことになった（83年迄）。CSが何かも知らないままのことであった。今思えばよくもそんな無鉄砲なことをしたものだと思える。当時、CSは4つの研究班に分かれ、毎週金曜日夕方に研究会を共同研究室Bで開催し、参加者は学内外を問わず多く、研究会は毎回満席状態で活気があった。4研究班とは、1980年に発足した「キリスト教と日本社会の研究」、「『七一雑報』の研究」、「排耶の研究」、「農民・労働運動の研究」であった。研究活動以外にも史料蒐集・整理作業として大阪組合基督教会と霊南坂組合基督教会の諸記録、故高橋正道文書に着手し、さらに『留岡幸助著作

集』の刊行と多岐にわたる活動を同時並行で進めていた。

拙者にとって特に印象に残っているのはCSの研究スタイル、研究対象や関係者の多様性である。『『七一雑報』の研究』班を例にとると、本班は1980年から85年まで6年間続けられ、1986年に『『七一雑報』の研究』（同朋舎出版）として研究成果が出版されている。同紙はキリスト教雑誌としては最古（1875～82年）のものである。キリスト教雑誌を研究対象とすることによって、同時期のキリスト教徒による日本社会・政治・文化・キリスト教・日本宗教観他を総覧しようということである。研究会運営にあたっては、参加者が雑誌を年度毎に分担し、全記事を研究会参加者のために紹介し共有化しつつ、一方で各自の専門性に沿った個別テーマの研究と発表を同時並行で進めていく形を取った。こうした学際性と実証主義に基づく共同研究はCSの研究スタイルとして確立しており、他テーマでも類似の方法がとられていた。研究会の共通テーマに基づき個別の研究者が各自の専門性に応じたテーマを研究し発表するというのではなく、参加者全員で対象を料理していくという研究手法がとても新鮮であった。次に、キリスト教史に関わる研究なので、キリスト教徒や関係者が研究するものという予断を持っていたが（自身が神学研究科に所属していたことも関係あるが）、CSのように近代思想と実践というもっと大きな枠組みの中で学際的に捉えることができるのだということがわかったことで、キリスト教への見方が大きくかわった。『七一雑報』だと、出版史、思想史、地域伝道や個別教会史というような限定的な分野だけでなく、（社会）教育、女子教育、科学技術、保健衛生、スポーツ・レクリエーション、アメリカ、朝鮮問題、社会事業、同志社他のキーワードからのアプローチがあった。

3 1990年代

CSでは80年代から継承した社会事業家の研究（山室軍平）とキリスト教雑誌研究（新人・新女界）の研究に加え、新たに天皇制、海外日本人移民キリス

ト教、プロテスタント教派、アメリカンボードの4研究が始まった。それぞれキリスト教の政治社会、海外日本人移民社会、そして日本キリスト教・教育・医療界への影響に関する研究であり、移民とアメリカンボード研究が含まれることで、CSは日本近現代史を越境し、日米関係や海外日本人社会史を視野に入れた研究に拡大されたものと拙者は理解している。拙者は、1989年、専任研究員（杉井先生の後任）としてCSの特にCをその後7年間担当することになったが、当時は田中真人先生が社会事業家（山室軍平、続く石井十次）とキリスト教雑誌及び天皇制を、拙者がアメリカンボード、教派史と海外移民をそれぞれ分担していた。田中先生ご担当の研究会はどれも盛況で、CSの伝統を生かしてさらに実績を着実に上げておられた。詳しくは木原先生、室田先生の稿を参照してほしい。

拙者が担当したアメリカンボード研究会は1989年から15年間継続し、『来日アメリカ宣教師』（現代史料出版、2004）、『アメリカン・ボード宣教師』（教文館、2012）を成果として出版した。1869～1890年に来日したアメリカンボード宣教師の多様性・多面性をもつ活動を、宣教師とボード本部総幹事間の書簡、議事録、報告、年次大会記録他を手がかりに明らかにしようとするものである。専任研究員に就任後の初仕事のひとつであり、杉井先生がとっておられた遣り方を思い出しながら、試行錯誤を繰り返す日々であり、専任研究員として研究会をスーパーバイズすることがいかに大変であるかを思い知ることになる貴重な体験であった。本研究はアメリカ研究所から「引越し」してきた企画で、CSに上手く適応、定着するか不安を抱えながらの再出発であった。最初の障害は研究の基盤となる史料の蒐集であった。人文研所蔵のボード史料では全く足りないのので、アメ研所蔵の宣教師書簡及び同大図書館所蔵のボード文書（マイクロフィルム）に加え、新たにハーヴァード大学図書館からボード史料を調査・蒐集してぎりぎり間に合わせた。次に研究会の編成である。拙者が赴任早々任された企画だったために自前の研究者ネットワークを持っていなかっ

たし、手書き英文文書が扱えることが研究会参加の基本的条件であったため、参加者集めは難航した。茂義樹先生（梅花女子大）、本井康博先生（同志社大神学部）、坂本清音先生（同志社女子大）、若山晴子氏（神戸女学院大）他の御協力をいただき、進めることができたのは幸いであった。最後に、前述のように英文手書き文書を活用した研究であるために、日本史よりも英文学・米英史の研究者を軸とした研究会となった。そのこともあってアメリカ史や洋学史ではなく、日本近代史を土台とするCSに宣教師研究が上手く馴染むのかという不安はあったが、日米関係史という視点から捉え直すという新たな試みが持つかな可能性を信じて進めていった。実証主義を意識しながら、CS共同研究スタイルを踏襲し、参加者は個別宣教師書簡を分担して内容全てを紹介しつつ、同時に個人的なテーマの研究を進める形態を採用できたのはよかった。手書き英文史料の解読にはそれなりの労力が求められたが、見返りは大きかった。教会、ステーション形成、聖書・賛美歌、学校（同志社、同志社女学校、京都看病婦学校、神戸英和女学校、幼稚園、梅花女学校他）、日本語、音楽他のテーマにおいて、日本の諸現場で起こる宣教師と日本社会や対日本人間の交流や齟齬・衝突さらには米国の本部や総幹事間での駆け引きや調整に注目して解釈を行うことで、日米両社会に影響を及ぼす異文化間ネゴシエーターとして宣教師を位置付け直すことを目指していたが、達成できたかどうかは疑問である。1996年に、同研究会として松下鈞氏がコーディネイトする「異文化交流と近代化—京都国際セミナー1996—」に、また2002年にキリスト教史学会大会シンポジウム「女性宣教師の伝道と教育—アメリカン・ボードの場合—」に参加することで、国内外の研究者達にCS共同研究の成果を発表できたことがせめてもの救いである。

4 2000年代から現在まで

CSは同時期に90年代から続くアメリカンボードの研究、海外移民の研究に

加えて、同志社史関係の研究が新たにスタートしている。2007年4月に田中先生が逝去された後、4年間の専任研究員不在期間を経て、2010年に田中智子先生が6年間CSの専任となられた。ご専門である日本近代教育史の視点を入れた研究が加えられたことになる。2013年9月21日～22日、田中先生企画でCSとしては初めての国際シンポジウム「磁場としての東アジア」（全4回）の一環として、「ミッション高等教育史の可能性」と題する学術会議を開催された。第1部「東アジアにおけるミッション高等教育史研究の来歴と現在」、第2部「越境する教育事業と「帝国」の時代—キリスト教界・公権力・地域勢力—」、第3部「戦時同志社史再考—世界史・地域史のなかの連鎖構造—」で構成されており、CSの戦時下抵抗やアメリカンボード研究を発展させるものである。陶飛亜先生（中国キリスト教史、上海大）、李省展先生（朝鮮ミッション史、恵泉女学園大）、小檜山ルイ先生（アメリカ女性史、東京女子大学）、水谷智先生（イギリス帝国史、同志社大学）、駒込武先生（植民地教育史、京都大）、寺崎昌男先生（日本高等教育史、立教大）の協力を得て成功させ、『キリスト教社会問題研究』62号（2013）に特集号を組んでいる。詳しくは田中先生の稿を参照してほしい。

拙者が長きにわたって関わってきた海外移民と日本人キリスト教会の研究であるが、1983年に「海外移民および海外伝道に関する研究」会として開始、会名を変えながら2018年まで継続し、『北米日本人キリスト教運動史』PMC出版（1991）、特集「カナダ日系社会とキリスト教」『キリスト教社会問題研究』41号（1992）、『在米日本人社会の黎明期—『福音会沿革史料』を手がかりに』現代史料出版（1997）、『ハワイ日系社会の文化とその変容—一九二〇年代のマウイ島の事例』ナカニシヤ出版（1998）、『先住民、アジア系、アカディアン—変容するカナダ多文化社会』行路社（1998）、『アメリカ日系二世と越境教育—1930年代を主にして』不二出版（2012）、『越境する「二世」—1930年代アメリカの日系人と教育』現代史料出版（2016）、『変容する二世の「越境性」—

1940年代日米布伯の日系人と教育』現代史料出版（2020）を成果として出版した。元々、佐々木敏二先生が発案された企画を杉井先生がCSの研究会として纏められたものである。拙者も発足当初から参加させていただき、最終的に拙者が当該研究会担当を引き継がせていただいた。確かに移民は日本近代史だけでなく米国史に於いても重要な社会問題であったし、ハワイ・北米の日本人移民史は同志社史と深く繋がっており、同志社は移民問題を介して日米関係に寄与してきたわけだから、CSとして取り組むに相応しいテーマであると思った。1990年代に移民研究ブームが訪れたことで、本研究会は追い風に乗って進むことができた面もある。当初は、19世紀末から20世紀初頭期のハワイ、アメリカ、カナダにおける日本人移民社会とキリスト教との関係に刮目した研究を進めていたが、外部研究助成（科学研究費、サントリー財団助成、日加研究賞）を受けるに至り活性化し、2018年まで続いた。その間に対象を広げ、地域においてハワイ・米国・カナダに加えて日本、南米、満洲を含め、宗教においてはキリスト教以外に仏教、日本新宗教を加え、時期においては1925～1945年までを網羅し、研究テーマにおいては移民国内でのキリスト教と日本人移民（二世含む）の同化や民族化の関係を越境史研究即ち移民と移民の出身国との関係史を連動させる方向にシフトさせて進めていった。日本では、当時、津田塾と東京経済大他が移民研究を共同研究として始めており、CSは後発組であったが、持ち前の資料的・人的パワーとそれを支える財政支援のお陰で、移民研究ではそれなりの研究成果を蓄積することができたが、キリスト教からの移民問題へのアプローチについては十分とは言いがたい展開であったところが心残りである。

現在のCSは、従来の研究蓄積を継承発展させるべく、木原活信先生の担当される社会事業史（2013年から）と拙者による戦後日米キリスト教関係史を対象とする2本立ての研究会を続けている。前者は社会事業者研究の流れを汲む

もので、後者は移民とアメリカンボード研究の発展系である。2019年に林葉子氏がCS担当の専任研究員（有期）に就任されたことで、CSが進めてきたキリスト教と社会改良に関する研究が充実することになった。人文研75周年シンポジウム（2019年）は今後のCSのあり方として2点の重要性を再確認する良い機会となった。それらはまず、CSの強味を生かすためにキリスト教と社会事業・社会改良領域の研究を今後も開拓し続けることである。次に、CSはグローバル化に対応すべく、キリスト教と社会の関係史を越境史（日本を起点とする）の枠組みでさらに発展させていくべきであるということである。日米、日英関係に重点を置きながら、当面は海外との相互関係を視野に入れた共同研究を組織していくというように広げて行ければと願っている。

参考文献・資料

『人文科学研究所30年史』1975

『同志社大学人文科学研究所の50年』1994

『同志社大学人文研の過去・現在・未来』人文研ブックレット、2020

『所報』同志社大学人文科学研究所

『キリスト教社会問題研究』その他

（同志社大学社会学部教授）